

2010年訪問活動概略

1月09日

(「震災被災者とボランティアの集い」のため訪問活動は行わず)

1月23日

・70代男性、一人暮らし。東灘区で全壊。糖尿病のため週3回ポートアイランドまで通院したり、2日に1回買い物をしたり以外はあまり外出しない。行政に対してもあまり期待していない。政権が変わっても私たちのような者のことは考えてくれないと思う。だから人に迷惑をかけないように、1人で前向きに生きるしかない。

・60代男性、夫婦2人暮らし。灘区で全壊。「テント村1年、仮設住宅4年」の後この復興住宅へ入居したが、旧公団から神戸市が20年契約で借り上げた部屋なので「その後の住まいが心配」、「今の住宅に住み続けたい!」と、自ら記入された支援シートをもとに、切実な訴えを伺った。

・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。退職後移り住んで1カ月で被災。近所では火災も発生し何人か亡くなったが、同じ建物に住んでいた男子学生に助け出された。最後くらいに当たった西区の仮設住宅で4年余りを過ごしてこの復興住宅へ。長く住み込みで働き一人で生きてきたため、近所づきあいが苦手とのこと。はじめは震災のことは思い出したくないとのことだったが、話しながら表情が明るくなっていき、40分にわたるお話し伺いに。

・20代女性。中央区で被災。被災後両親と加古川市の親戚宅へ身を寄せた。震災のときは9歳だったのであまり覚えていない。1月17日に男児を出産したと聞き、思わず「おめでとうございます」と言った。

・60代男性。中央区で被災。下着の中に食料品が入っていたりするなど、支援物資は使えなかった。近くの私学で避難生活をしていた間、住所がなく仕事ができなかった。やっと当たって入居したポートアイランドの仮設住宅は「人間のゴミ捨て場」。まるで「貧乏人は要らない」、「もとのところへ帰りたければ自力で」といわんばかりとのこと。自身でも震災に関する資料を集めてアルバムにまとめている。

・30代女性、家族3人暮らし。中央区で自宅・店舗とも全壊。仮設住宅になかなか当たらなかった上、この復興住宅へは旧公団に申し込んで、家賃の減免が全くない条件で入居。

2月13日

・60代女性、一人暮らし。灘区で全焼。「まさか、神戸に地震は来ないだろう」と思っていた矢先のこと、娘さんと共に着のみ着のまま脱出。仮設住宅は都賀川の公園で、桜の風景等が美しく、意外にも楽しいことも多かったとポジティブに語っていただきました。また当時、人間の善と悪が共存していて、不足する物資を親切に提供してくれる人間がいる一方で、物資の強奪まがいのことが起きて。食事中にマスコミがその風景を取材に来たり、アマチュアの人間が無許可で写真を撮りに来ることによる『プライバシーの縮小』に困ったという話しは、特に意外に興味深かった。この復興住宅は最後の抽選でようやく当選。新築のため家賃は高い。現在は年金も受給しているが、家に籠りきらないようにするのも大事と、介護の資格を生かしてグループホームなどで介護の仕事をしている。たくさんのお孫さんにも恵まれ、1番上は18歳。

元気そう。震災の話題は現在なかなかしにくいと、話を聴きに來てくれるのがありがたいと今回の訪問をとて喜んでくれた。1年ぐらいはボランティアもしていた。震災時の水配りで足を少し痛める。楽譜をプレゼントされて喜ぶ。被災され、辛い思いもしたようだが、「人生長ければ苦勞は誰にでもある」とそれを快活に笑い飛ばす。

2月27日

・70代男性、中央区で全壊。自宅は全壊したが、経営していたアパートは残ったので、そこに住んだあとこの復興住宅に。被災してテント生活を送っていた80人ほどの近隣住民に届けられる食糧の仕分けを早朝からしていた。初めは16人で作業していたが最後は自分一人に。テントを閉めたあとはみなバラバラに。

・60代女性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。おしどり夫婦で永年理髪業を営み、ご主人は朝刊配達もしていた。震災の時、ご主人が配達し終えて外に出たばかりのビルが倒壊、4時間後に帰宅して埋まっていた奥さんと娘さん、お孫さんを救出。奥さんはタンスの下になりお孫さんを引き寄せたきり動けず、娘さんとじっとしていた。すぐ近くの空間にネコが居たのが分っていたが、ネコは解体時まで取り出せなかった。奥さんは以来腰痛に悩まされ、最近では頭部にできた腫瘍を除去する手術を受けた。震災後一時親類宅に身を寄せたが、ポートアイランドの仮設住宅に最後までいたあと、最後の抽選でやっとこの復興住宅に。震災後間もなく仮設店舗を経て営業再開したが、2年4ヶ月前、配達中にご主人が倒れ、ほとんど意識がない状態に。店も閉め、自身の入通院のとあわせてご主人の入院先に通う。会話ができなくなったと涙ぐみ悲しんだが、夫を亡くした参加者の一人が、声かけをしてみるよう勧めたりする中で、気持ちが晴れたと、表情も明るくなっていった。廊下の端まで手を振って見送って下さった。1時間半のお話伺い。

3月13日

・40代男性。被災しておらずこの復興住宅へ入居したのは去年とのことであったが、各戸をまわって「お話し伺い」を続ける訪問ボランティアの趣旨を理解していただけるよう、短いやり取りの中でも留意した。

・兵庫区で半壊。訪問時お留守との連絡をあらかじめいただいていたが「有難うございます。今のところ元気です。(あんしん)すこやかセンターでお世話になっていますので…」と、自身で記入した支援シートを戴いた。介護予防生活支援サービスを利用されている模様。

・60代男性、灘区で全壊。訪問時お留守だったが「健康状態は良好です。心遣いありがとうございます」と、自身で記入した支援シートを戴いた。

・40代女性、母が須磨区で全壊、近くの私学で避難生活を送った。区画整理のため、もといいた場所に戻れず自分がある大阪へ。復興住宅入居で不利になり、ここへ入居したのは4年前。

3月27日

・70代女性。中央区で全壊。小学校の避難所に3ヶ月いたが、その後近くの文化住宅に移り、小学校までお弁当をもらいに行った。仮設住宅は何度申し込んでも当たらなかった。ご主人と娘さん、自分と怪我もなく助かったのは何より。息子さんは別のところにいて無事。マンションごと潰れていたのを呆然と見ていたように思う。火は出なかったものの何一つ出せず本当に

それぞれ身一つで逃れた。その頃から体の弱いご主人は、3年前に他界。この復興住宅には出来てすぐ入居し娘さんと2人暮らし。自分はペースメーカーを入れているし、娘さんは病弱で入退院を繰り返している。息子さんは40代。避難所の話を懐かしそうに、あの頃は皆それぞれがいたわりあってしたが、ここに移ってからは集会所にも人はあまり集まらなくなったと淡々と話した。もしこれから災害があればと思い水と少しの食べ物はいつも貯えている。娘さんが早く良くなれると良いですねと30分余りのお話伺い。

・80代男性、妻(70代)と2人暮らし。東灘区で全壊。中学校で避難生活をしていましたがタバコを吸うのであまりいい顔をされず、マンションを借りて4年いた。地震の時全壊した家の地盤が、1938年の水害でゆるんだ上に建ててあったのでだろうか、すごい揺れで柱が2つに折れた。JRの線路沿いの石垣が崩れて出られず、中の者は息子さんが助けた。1990年にペースメーカーを入れ、病院で3ヶ月に1度検査を受けている。息子さんは1人だが、今の世情でまだ独り身。今の若者はかわいそうだと。ご主人は体が弱く60歳までしか勤めが出来ずにいるが、奥様がお元気で今も働いている。そして戦争の話しをされた。昔は近所どうし助け合って生きていた、また奥さんが世話好きで一時は近所の子どもを5人くらい預かっていたことも。それに比べて今は隣は何をする人ぞですね。でもここは年齢がいつているので管理費を安くしてもらい安心。話しの途中、窓の下を指差して「ここには保育所があった」と。現在日本が困り果てている沖縄の話などもしっかりと話され、若い頃志願兵をして行ったのはごはんがお腹いっぱい食べられるから、戦争・空襲・水害・地震と何もかも経験した中で若い女性が爆撃でたくさん死んだことを今でも目に残っている、挺身隊の白いタスキが草の上に並べられていたことを思い出す、戦争はいやですねと。1時間以上の訪問。最後には「清水次郎長」の歌を3番まで歌ってくれた。

・70代女性、灘区で全壊。姉妹3人で大学体育館で2カ月お世話になりました。不自由、大変だったこともありましたが、今思い出としてお世話になった事、楽しかった事だけが思い出せません。体育館を暖かくしていただきありがとうございますの一言につきます。現在は姉が介護4で私たちも病気がちです。心配事といったらきりがありませんので一日一日を楽しく過ごしています。今後ともよろしく願いいたします。(自筆記述)

4月10日

・70代男性、一人暮らし。兵庫区で全壊。怪我はなくガレキの隙間から自力で脱出。その時は「アツ」という感覚だった。近くの公園に1月ほど避難、仮設住宅に申し込んだが当たらなかった。一番困ったのはトイレ。あちこちに穴を掘ったり、水道が復旧していない水洗トイレに給水車からもらってきた水をほとんど費やしたりした。こうした状況にたいして市職員は衛生が悪いと文句を言うだけだった。その道の組の人が肉を差し入れてくれた。「やっぱ人間やで!」。自衛隊の風呂に入ってやっと汗を流した。水道が復旧した娘さんのマンションへ移ったが、電気・ガスの復旧が遅れた。今はどんなところへ住みたいかと聞くと、高層住宅ではなく地面に接したところに住みたいと思うが…とのこと。廊下に出て六甲の山を見ながら、30分のお話伺い。

・70代女性、夫婦2人暮らし。芦屋市で全壊。近くの小学校に避難したが、トイレ掃除がたいへんだった。市外の公営住宅を経てこの復興住宅へ。テレビが楽しみ、介護保険料が高くなってたいへん、今では地震のことを笑って話せるようになった。

・40代男性、一人暮らし。灘区で半壊。息子3人は逃げたが父親は母親の仏壇のため家に残った。近くで何人か亡くなった。港湾の仕事をしていろいろお話して下さった。政治に関心があり、ビールが友達。訪問に向かうボランティアの姿を見て待っていてくださった。

4月24日

・80歳女性、今は息子さんとお孫さんと3世代で住んでいる。訪問を待っておられ、玄関に入れていただき、お話を伺う。地震のとき、ゴー、ドーンなど爆弾のような音がして、次に揺れが始まった。が南北に揺れたので何も落ちてこなかった。家族は誰も怪我はなかった。避難所、仮設住宅には一度も行ってない。半壊のまま屋根など修理して住んでいた。姉の家が全壊したので一緒に住む。電気は早く復旧したガスは遅かった。煮炊きはカセットコンロなどで。他に、炊き出しやおにぎりなど、地域の青年団の人達が配達してくれた。住吉川の東側に住んでいたの、川から水を汲んできた。風呂は1ヵ月後に尼崎まで入りに行った。他に比べて被害が少なかったと言っておられた。夫が5年前に肺からくるリンパ腺がんに罹って死亡。その3年前に脳梗塞で倒れる。病気の原因と震災との関わりはない。夫が経営していた長田の工場、旋盤工場は全壊。機械など潰れてしまい、再開するも機械の購入等で大変だった。景気が悪くなる一方なので尚更…と。近所とも付き合いがある。1999年4月にこの復興住宅に移り住む。約50分のお話伺い。

・70代女性。長田区で全焼。近くの小学校に避難したが、そこにも火が迫ってきたので、別の中学校に避難、3~4日過ごす。枚方市の弟さん宅を経て、京都市の公団住宅で3年8ヶ月過ごす。いろいろな手続のため長田区役所に通った。4年目にやっとここが当たり嬉しかったです。10年前にご主人が亡くなった。その後当初C型肝炎だったが治ったと言われたのにガンと診断を受け、11回入院を繰り返したが今は落ち着いている。病気がわかるまではボランティアもしていたが止めて今に至っている。老人会に入ってボーリングを楽しんでいる。子どもはいない。姉妹と弟と6人で今も来ている。

5月8日

・60代男性、灘区で全壊。我々の訪問を待っていたらしく、快く話に応じてくださった。震災前は灘区に住んでいたが、震災で自宅が全壊したためにたいへん困った。震災後は、経営している会社の事務所として自宅を建て直し、現在に至る。入居してから11年が経ち、現在妻と息子2人の4人で暮らしている。震災直後、奥様が倒れたガラス棚の破片で額を切る怪我をしたが、須磨から来ていた病院の優しい外科の医師による手当のおかげで、傷跡が残らずにすんだ。近所で亡くなられた知人の話をされた。家の裏手に住んでいた足の不自由な方を助けようと、「助けましょかー！」と声をかけたが、その方に「もういいですわ」と言われたエピソードを、涙を滲ませながら語った。現在はご夫婦揃って元気で、ボランティアの訪問をありがたいとおっしゃってくれた。震災時の話だけでなく、ご息子が沖縄ファンであり、彼が神戸から沖縄、宮古島を経由して石垣島にも行ったことがあるのを話してくださった。知人を失うという辛いことまで語っていただいたことに多少の罪悪感を覚えたが、彼は最後まで我々の問いにいやな顔ひとつせずずっと話しを続けてくれた。

・80代夫婦2人暮らし。灘区で全壊。近くの中学でしばらくの間避難生活を送る。その後は六甲アイランドの仮設住宅に移るが、住みづらかったために県外の県営住宅に引っ越した。そのた

め復興住宅にはなかなか当たらず、現在の旧公団からの借り上げに10年前やっと入ることができたが、家賃が高く1人になれば払いきれない。夫婦ともに足が不自由のようで、奥様は手押し車でかろうじて買物ぐらいは行けるようであった。御主人は自転車で2回転んだのが原因で歩くのが大変になり、週1回の病院への通院には車椅子を利用されているとのこと。週1回に1時間半だけホームヘルパーさんに掃除や用事などをお願いしている。御主人の生まれは神戸で兵隊にも行ったが、海外ならば恩給がついたのに国内であったのでそれもなく、2人の子どもも結婚してあまり家に来ないし、知人とも離れ、近所の人と話すこともなく寂しいと、とつとつと話してくださった。また時折話はずむ中で、現役時代の電車に35年務めた。今の楽しみは野球とプラモデル等を作ること。今の家の家賃は高額で市営住宅や県営住宅に入居したいの思うようにならない。とうに金婚式は過ぎたが、もし1人になった場合に現在の家賃が払っていけるかどうか不安で心配。週1回のヘルパーさんでは近くにある病院に連れて行ってもらえるだけで他にしてもらえることが少ない。除隊のときは3万しかもらえなかった。風呂は1人で何とか入るが大変。御主人の父親は100歳まで長生きしたが「年はとりたくない」と寂しそうに呟いた。

・60代女性、夫婦2人暮らし。中央区で全壊。犬を抱いて冷蔵庫と流しの間に立っていて命は助かったが、引きこもってしまった。震災から4年後脳腫瘍を患い緊急入院。余命6ヶ月を宣告され、身辺整理を始めるも回復は早かった。夫はこの間疲れきって何もする気を起こさなかったが、この時ばかりは奮起して日雇いの仕事をして現金を稼いだ。退院して「映像が消えた」。母の顔すら思い出せない。余命宣告が訪れた8月に母が亡くなった。母から命を授かったと思った。母から常日頃から、夜は風呂・ヤカンなどに水をいっぱい張りなさいと教訓を受けていたことがこの震災では役に立った。近所に住む人が妻・娘・ネコの呻き声を3日間聞いていた。近所の人たちも聞いていた。みんな手に道具を持って助けようとしたが果たせなかった。無念の想いから今でも耳から離れない。また、小さなビルに母子4人で住んでいたが、母親は赤ちゃん1歳と4～5歳の子どもを抱いて圧死していた。常日頃から母親が夜仕事に出るとき、送る子どもたちの声が耳に残っている。それから肺ガンを患い(余命4ヶ月)、放射線治療を受けてガンはなくなった。リンパ腺に近いところなので効果は10%と言われていたが…。「わたしの家には喫茶店に来るように、いつでもお茶を飲みいらっしやい」と気楽に声をかけて頂き、家に入れて頂いて、1時間余り震災と震災後のお話を傾聴。

5月22日

・外国人の若い女性。震災時は近くのマンションにいた。近所の方も被災に遭い困っていたという。家賃が毎年上がるため不安で困ると。ボランティアに対してかなり強い警戒心を持っていたように感じられた。「それを聞いてどうするんですか？」とたびたび聞かれたとき、ボランティアとしての自分の立ち位置を改めて考えさせられた。

・70代女性。一人暮らし。東灘区で半壊。当時も一人暮らしであった。ご自身は手を切る怪我をしたが、近所で亡くなった方はいなかった。しかし、家がつぶれてたいへんな人が多かった。震災直後は近所に住む娘さんのところへ行き、それから小学校で3～4日ほど避難生活を送る。その後は東京に住む山男の息子さんが水や食料をリュックに背負って来てくれた。その際奥様は自転車で、息子さんは徒歩で西宮北口から歩いたという。当時は北口まで電車が續いていたが、すごい道であった。震災後は東京で一時期暮らし、近い市で1年半ほど部屋を借りて住み、

この旧公団の復興住宅へ。仮設住宅に住むことはなかった。ここで付き合いがあるのは2人。親しい方たち以外とは特にお付き合いはないが、老人会には入っている。10年ぐらい住んでいる。電気の取り換えなどが危なくて一人ではできず、放置したままの状態。

・60代女性。震災前から一人暮らし。西宮市で全壊。すぐ近くまで火事が近づき、大家さんが家の下敷きになり亡くなった。本当に痛ましかった。子どもは娘2人。被害の少ない地区でそれぞれ独立していたので助かった。避難所は近くの小学校だったがガスが漏れているとのことで大急ぎまた近くの中学校に移りました。どうしたものかと思っているところ娘さんの御主人が4駆に乗って連れに来てくれ、嬉しかった。それでも近くに女子寮が空いているとかで、この復興住宅が出来上がるまで4年ほど居。この復興住宅には出来上がってすぐの入居で11年。定年後も働いていたが、両手を骨折して退職、今も金具が入っている。去年9月かかをとを骨折し、そこにも金具が入っているが、「でも杖なしでここまで歩けるようになりました」と。不安なことはと尋ねると「やっぱり一人暮らしですからね。娘たちには毎日電話してよ」。家賃は「始めから覚悟はして入っているのであまり心配していません。共益費と合わせ×円ほどですが近くに買い物もでき、充分生活としてはいいところです。家賃が上がればその分何かを節約すればいいし…」。

6月12日

・60代女性、灘区で半壊。入居して10年の夫婦。御主人は70代。近所は大変な被害を受けて、火事がないだけまし。半壊の家にまだ住めたのでここにしばらくいたが、近くの公園まで水を汲みに行くのが大変だった。東灘区に賃貸で4年ほどいて、この旧公団の復興住宅には10年前引越して来た。「世の中には色々ありますね。一つ終わると次にまた何か起きて一寸先は闇ですね」と。「この住宅が当たりました当時は不自由でしたよ。今ではとても便利で公団は気楽ですが、お家賃がね」。近所づきあいではこのフロアーはよそよりコミュニケーションが取れている。御主人はガーデニングを楽しんでいる。今後の心配事は「別にないかなあ」と言いながらも「一つ解決すると次々と何かが起こりますでしょう。でも今まで何とか乗り越えてきましたし、先の心配してもしょうがないし」。「何より2人元気で毎日が過ごせているのを感謝してます」と。「もし私一人になったらもう少し小さいところに引っ越しますよ」と終始笑顔で話された。

・70代女性、中央区で全壊。一人暮らし。「ボランティア御苦労さまです。中央区で被災し、自宅は全壊。現在の健康状態は良好（毎朝5時半に起床し、散歩と体操を日課にしています）。一人暮らしゆえ、皆様のお世話にならぬようにと日々健康には気をつけていますが、何時どのようなことが起きるかわかりません。先の心配ばかりしていても仕方ないことなので、毎日元気に明るくをモットーとして生活しています（その折には皆様にお世話になることでしょう）。年金暮らしの我々には市税、公共料金がなくて負担に思います。今少し余裕のある生活ができればと願っています。」といった内容が支援シートに書かれていた。訪問した際、来客中であったが、2回の訪問とも快く対応して下さった。

6月26日

・70代女性、中央区で全壊。公団住宅の8階で、「ユラユラ・ゴー・ピカピカ光って、次にもものすごい揺れが来た」。窓が開いていてそこから助けを求めた。歩いて階段を降りた。1階は

自動車展示場になっていて、柱がなく押しつぶされていた。市役所に避難していたが追い出しにかかって、2月始め故郷に一時身を寄せた。歩いて神戸まで行き、姫路から新幹線に乗った。6ヶ月無料のポートアイランドにある公団住宅に入居。その後北区の公団住宅に3年ほど入居。この復興住宅に「市の20年借り上げ」でやっと入れた。しかしここも家賃が上がってくるし、20年後の先行きが心配で、市営住宅に申し込むが当たらない。67歳まで働いていたが今は年金だけ。借り上げ期間を延長してほしい。故郷に89歳の母親が一人で暮らしているので、帰ろうか迷っている。入居4年目。訪問時間40分。

・70代女性、夫婦2人暮らし。中央区で半壊。自宅は住めたので、特に避難所や仮設住宅に行かず。この復興住宅には完成直後に入居。娘さんが一、現在は家を出ている。家賃はこれ以上上がることはないということでした。ご主人は建築の仕事に就いていたため、震災直後は仕事が絶えることなく大変で、その仕事を奥さんも現場に出て手伝っていた。その仕事も現在は引退状態で、パソコンやガーデニング（トマト）をしながら毎日を悠々自適に過ごしている。ご主人が以前に仕事で脚立から落ち、4日ほど意識がなかったので心配したが、頭を打ち少し頭が重い感じがするものの、特に後遺症もなくお元気な様子。震災直後は知り合いから電話が沢山掛ってきて、恐怖と不安もあったが、今ではもう震災の事を思い出すこともない。「いつでも寄って下さいね」と言う奥様の手が有難く「我が家は知人は誰でも入れますよ」と言う言葉に「また寄らせて下さいね」と言いながら、1時間の上がり込み訪問。

7月10日

・70代女性、弟さん(60代)と2人暮らし。東灘区で全壊。同区内の避難所・仮設住宅を経て、旧公団からの借り上げであるこの復興住宅へ。仮設住宅よりこの方が住みやすい。足が悪いが、一緒に暮らしている弟さんが買い物をしてくれるので助かり、今となってはあまり不便はない。

・60代男性。中央区で全壊。地震が起こったときは、急な仕事のため出勤する準備をしていた。近くの公園に張られた自衛隊のテントで（1張に5～6人）8月まで避難生活をしたあと、ポートアイランドの仮設住宅へ。その頃は建築関係の仕事をしていた。この住宅ではコミュニケーションがなく、仮設住宅の方がよかった面もあった。玄関先でお話を伺う中で、参加者の一人と出身地、さらには出身中学校まで同じと解り、ふるさとの話題で話が弾んだ。家の方に帰ってこないかと言われているが、1人でしっかり生きたい。医者嫌いなのでなまじ病気は見つけないとも。

・80代男性、一人暮らし。中央区で被災。05年ごろよりクモ膜下出血や脳梗塞を患い、とても対話できる状態でないからと、「神戸在住50有余年／健康は一応順調／仕事は神戸港が主」など、自ら支援シートに記入。

7月24日

・80代女性、一人暮らし。東灘区で全壊。震災の時は大工のご主人と2人暮らし。大阪に住む妹の子どもが迎えに来てくれた。大阪で10日ほど過ごした後、被災者の受け入れをしていた島根県の市営住宅に移り、神戸に戻るまで4年間過ごした。島根は奥様の故郷で、「電話をしたらすぐに来いと言ってくれ、良くしてくれましたよ」。ご主人が地元紙に取り上げられるなど、島根県のメディアが取材にきたことも。島根に来る際、「県外へ来たら（神戸に）帰られないかも…」と考え、覚悟していた。島根は住みやすかったが、50年を神戸で過ごしてきたことも

あつて、ご主人が帰りたいと言うようになり、それを聞いた知人が帰れるようにしてくれ、神戸に戻ってこられた。「戻ってきてから12~3年が経つけどやっぱり神戸が一番」。現在は市が10年間借り上げているこの復興住宅に住んでおり、家賃は少しばかり安いそうだが、もうすぐその期限が来るために旧公団の家賃に切り替わる。3年前にご主人がガンで亡くなった。50代の娘さんが一人いて、時々顔を見せにきてくれるのが心の支えだが、「一人はさみしいものですよ…」としみじみと語った。また「年だから老後と、今は足が心配」と呟いた。足が痛い時は買い物などを手伝いに来てくれる人に頼んでいるが、そうでないときは一緒に買い物に行くようにしている。「仮にまたあのときのような地震が起こってもどうしようもない」とも。

・90代女性、中央区で被災。あまり震災のことは覚えていない。震災時にご主人としっかりした息子さんの3人家族で住んでいた。ご主人は病気で亡くなった。仮設住宅で過ごしたこともある。震災を思い出したくないのではないかという印象を受けた。

・80歳女性。東灘区で全壊。ご主人は被災時既に亡くなっていた。自宅マンションは全壊でしたが、建物自体は残っているそうです。上の階に住んでいた若い女性と共に近くの小学校へ避難したが、隣接するガスタンクからガス漏れの危険があるということで他の小学校へ。その後、東灘区の仮設住宅で5年間過ごした。華道の要職に就いていた関係で、お弟子さんの安否確認を優先し可能な限り長く仮設住宅にとどまった。仮設住宅ではお弟子さんに安否確認の手紙を出し、その枚数は1000枚を超えた。また、生徒さんの家を訪ねて歩いて回ったりもした。まだ60代で、気が張っていたからできた。3人の方の死亡が確認されたことを嘆いていた。この復興住宅には10年前に入居。交通の便や環境もよく、市の住居費減免処置のため家賃も安くとても住みやすい。現在は特に不安もなさそうで、お元気そうな様子。

・80代女性。1人暮らし。東灘区で被災。揺れて無事なにごともなく。毎日が神様からの変化球。すっかりと抜け落ちてしまいました。(自筆記述)

8月14日

・80代女性、一人暮らし。中央区で全壊。仮設住宅で3~4年暮らした。地震のことは思い出すのもいや。夫は10年ほど前に亡くなった。今の楽しみは近所でやっているラジオ体操に通うことで、もう10年続けている。自分の身体さえ元気なら、今心配なことはない。住宅内にある住宅にある福祉センターから時々来てくれる人がいる。地震の話題では表情が暗く見えたが、それ以外は笑顔で話してくれた。

・60代男性、一人暮らし。兵庫区で全壊。現在無職だが被災当時は建設業。ポートアイランドの仮設住宅に少し住んだ。お母さん(中央区で全壊)の介護が必要になり同居。約10年介護を続けたが今年6月に大腸ガンで亡くなった。生前、「人のためになる事をしたい」とユニセフに寄付をしたり、人に何かをするとき見返りを求めてはならないと説いていたことなどを、涙ぐみながら語ってくれた。訪問時、お母さんの供養の品を持って玄関を入るところだった。

・80代男性。中央区で被災。現在入院中で近日退院予定である旨を、同居の方が支援シートに記入。

・30代男性、一人暮らし。中央区で全壊。ポートアイランドの仮設住宅に一時いたが、会社が借り上げた住宅に長く住み、この復興住宅に入居して2年半。建設業に従事して、給料を多くもらっていたこともあったが、現在は無職。震災でいろんな経験をしたが、あまり震災の事を引きずっていない。

・70代女性、一人暮らし。東灘区で被災。親族宅や生まれ故郷近くの島など、北区の仮設住宅を経てこの復興住宅に入居するまで5カ所を回った。40代で亡くしたご主人も昨年33回忌。働き続けてきた長年の無理がたたき、多くの病気を抱えていて、体重も28kgしかない。ケアハウスに入っていて、帰宅したばかりのところへの訪問となった。今まで力一杯に生活してきたので悔いはない。自分に負けずに生きたい。最後にみんなと握手をして別れる。

8月28日

・70代女性、灘区で全壊。震災時は夫婦2人暮らし。ちょうど断層の真上で被害が一番ひどい地域に住んでいたため、付近一帯はほぼ壊滅し、近所で亡くなった人も多かった。また、同じ断層上で被災したの知り合いも「柱がねじ曲がるように折れた」と凄まじさを語っていた。ご主人をこの地震で亡くした。柱や簞笥が倒れてきた際、ご主人に庇われた。最期の言葉は「大丈夫か？」で、最期まで奥さんを気にかけていた。崩落した建物に挟まれ身動きが取れなかったものの、幸いにも炎上することなく、まもなく救出された。その後、近くの小学校に一時避難し、そこでご主人の検視をしてもらい、大阪市の親戚に火葬してもらった。その後1月ほど故郷の松山に帰郷し、六甲アイランドの仮設住宅に4年間住んだ後、旧公団からの借り上げであるこの復興住宅にようやく当選。震災時に肝炎を患っていたものの、特に日常生活に支障はなかったが、昨年心臓の病で倒れて手術を受け、また肝臓の状態も悪化して現在は日常生活に不自由するようになったが、ヘルパーさんや親せきの奥さんが色々と手伝ってくれるので大いに助かっている。夕方までは玄関のカギを開けておくなど、他人との関わりを求めているようで、上がり込んでのお話伺い。

・60代女性、東灘区で被災。ご家族4人のうち長男を除く3人が足などに重傷を負い、無事だった北区の病院に入院したが、幸い今は完治し生活に支障はない。震災直後は被害を免れた主人の姉の家にもろもろ世話になり、退院後はその近くのアパート→マンションに3年と転々とした。何度も旧公団に申し込んだが、まだ当時十分若かったため、この復興住宅にようやく潜り込んだ。現在もご主人は働きに出ている。震災当時高卒で働きに出ていた長男の会社が震災で傾きかけたり、奥さんが4年前より肝炎を患い治療を受けていたり家庭内でもろもろありながらも、現在は平和に暮らしている模様。

・70代女性。灘区で全壊。全壊のアパートを大家が修理したが、やはり怖いので実家の三重県で1年ほどいた。新開地の公団住宅に2年いたが、家賃が高いのでこの復興住宅に1992年に入居。新聞入れに入っていた、住み替えを求める神戸市の借り上げ住宅のチラシを見て、怖くなった。2019年までにここを空っぽにしないと書いていると書いてあった。それを見たときは眠れなかった。9年後は85歳。その年齢では引越しができないので来年にでもここを出なければと思った。一人暮らしで29年間過ごしてきた。電球の付け替えやクーラーの簡単な掃除ができたらいいのに、住み替えは、「あとになると不自由な場所に移されそうでつらいです」と。そして最後にケアハウスをつくってくれたらいいのに、安くて入れるとこがあれば残りの9年後、安心して生きていけるのに、と少し寂しげな声を出された。

・70代男性、東灘区で全壊。約30分の訪問。公民館に1年いて、六甲アイランドの仮設重たく入って、この復興住宅に入居11年目。寂しいと思ったことはない。2ヶ月に一度検査するが悪いところはない。初めはドアも半開きで、話も弾まなかったが、造園のこと、趣味のことなどを話し出して長い時間のお話伺い。今も現役で造園の仕事をしており、「自分は樹木の関

係で働いている。花壇は素人さんがやるもの。今は知り合いのところで働いている」。兄弟は5人。全員、神戸に住んでいる。震災の時より一人暮らしだが、今は元気で老後の心配はしていない。今は夏場なので暇だが、秋から忙しい。今の時間帯に家にいるのは珍しい。暑いので今は仕事を控えている。今日は会えてよかった。趣味は魚つりと登山。昔は東シナ海まで行っていたが、今は和歌山や淡路島まで。造園の仕事は40年。米作りのことなどをびろいろ身振り手振りで教えてもらった。

9月11日

・70代女性、夫婦2人暮らし。灘区で全壊。ご主人がガラスの破片で怪我をしたため、避難所で麻酔がない状況の下、赤十字の先生に応急処置をしてもらった。最初に東灘区の小学校に、その年の6月に別の小学校で避難生活。その後近くの8万のマンションで1年、新築のマンションで4年を過ごし、1999年になってこの復興住宅に落ち着いた。76㎡は2人では広すぎますよね、と。避難所では給食の係を5～6人で受け持っていた。小学校では1500人分の弁当が来ていたが、残ることもあり、外部から来た方にも配った。水は1人1本でした。京都や奈良の女性の方々がボランティアして下さり、有難かった。今でもカラオケの世話などのボランティアや防犯にも力を入れている。今は不安はないが、将来の家賃の値上がりがちよっと大変かな。活発に行動されているが近隣トラブルには頭を悩ませているとのこと。機構や市に行って話されているが、掛け合っても埒が明かない。約40分のお話伺い。

・60代女性。灘区で全壊。1年半のテントと1年の仮設住宅での生活を体験。当時のご主人と娘さんの3人で暮らしていたが、ここに入居してから娘さんは嫁ぎ、御主人はそのあとにガンで亡くなった。その間、入退院を繰り返して、最後にはホスピスへ入所できたが、自宅で最期を迎えたいとの願いを聞き入れ自宅での介護に。少し小さい家を申し込むか検討したが、時期を逃した。震災前も今も2箇所かけもちで勤め、旧公団からの借り上げ期限である10年後の返還のことはあまり深く考えたくない、その時が来ればその時に考える。

9月25日

・70代女性、一人暮らし。中央区で半壊。ご本人直筆。健康状態は今非常に悪く、外出ができない日が多い。若いころの交通事故の後遺症が震災後に悪化して60歳で辞職しました。現在は慢性心不全による障害者です。家庭内での日常生活、活動が著しく制限される心臓機能の障害です。

震災後、北区の兄の家で10日間。バスが開通するようになって朝一番のバスで家を出て、それから徒歩で三宮～六甲道、会社に到着が昼前。通勤時間がかかるので8時ごろ最終で兄宅について10時。一番辛かったのは通勤時間と、社員の女性8人でしたが田舎に帰ったりしてたったの3人。1年間は事務所は多忙で会社に近いマンションを借りて朝8時に鍵を開けて帰宅は10時。山麓バイパスのトンネルが普段は15分なのに、震災のときは着くのに2時間くらいトンネルの中で、非常に体力的に辛かったです。(本人直筆)

・女性、2人暮らし。東灘区で全壊。約30分の訪問。震災後は親戚の家で4～5年過ごして神戸へ戻った。借上住宅の件は初めから解っていたが、今はすごく便利になって、家賃が上がり、共益費が1000円下がりました。今は少し勤めている。この前のチラシには、引越料も出ると書いてあった。しかし、お年を召された方に時々お会いすると、引越しすればまたコミュニケーション

ョンがなくなるし、もう引越すする元気がないと嘆いた。自分は震災後、親戚の家だったので、被災者扱いされていないが、買い物に行ったとき、疲れているお年寄りを見ると思わず荷物を持ってあげたくなる。県外から引越しをされたお年寄りは特にかわいそう。いついつまでに明け渡しと言いながらも、2、3日前には人が引っ越してこられたのも見たし、できればお年寄りの方はもう少し待ってほしいと。本当に引っ越さなければならぬのなら順番にしてほしい。いつが最後の引越しなのか。今は、ここはとても便利でできればここにいたい。

・60代男性。灘区で全壊。稲島だ若くてなかなか仮設住宅に入らず、小学校の避難所に1年弱いた。その後、ポートアイランドの仮設住宅に入居。被災前は2階建てアパートに住んでいた。近所では亡くなった人がいた。ここは寒い。身体を壊した。たばこ、酒のにおい、ヤニがすごい。生きていくのが精一杯。仕事がなく生活保護でなんとかやっている。出なければいけないが出るところがない。なんとなく住んでいる。高血圧、痛風、肝臓が悪い。今は飲まないが昔はかなり飲んでた。外出は買い物程度。がらんとした部屋で、一人横になってテレビを見ている。多くを語りたがらない。

10月9日

・60代男性、兵庫で半壊。家族に怪我はない。奥さんと大学生、高校生の4人暮らし。ご主人は神戸港の検数(けんすう)職場。震災後も職場を離れられず、子ども(当時小学生、保育園)と奥さんの実家の広島に避難。ご主人は友人宅で1ヶ月お世話に。港は2年ほどで開港した。震災後、職場の人間は2、3年は東京、名古屋、大阪などに行った。戻ってこない人も多い。この復興住宅には新築から住み、入居11年。旧公団で家賃が高いので隣の市営住宅の部屋に変わりたい。3LDKで80㎡。市営住宅よりは広い。今は同じ職場で契約社員で働く。自転車で通勤。神戸港は今は暇である。コンテナは韓国、シンガポールに移った。今は、中国への衣料の荷があるぐらい。給料は大変減った。だからさらに人が減る。今は、今は基礎年金とトラック運転手の給料。給料は安くなったが年金があるからやっていける。

要望はと聞くと、初めは買い物が不便だったが今はスーパーができてよくなった。将来は妻の実家があるのでそこに行くことにしている。

・70代女性、灘区で半壊。その当時は仕事をしていたので起きていた。電気の傘が落ちてきたりして大変だった。すぐにジャンパーを引っ掛けて夫と2人、ただ呆然と表に立っていた。長男が見つめてくれた。近くの小学校の避難所はいっぱいで、駆けつけてきた子どもたちと、車の中に毛布を持ち込んで6人で丸2日過ごす。避難所に安置されていた姪の父親が火葬されるまで、食べ物がなく、2日目に饅頭1つだけで過ごした。孫がお腹がすいたと悲しそうにいった言葉が思い出される。その後丸2ヶ月は息子の住んでいる西区に身を寄せる。夫は震災前から人工透析をしていた。中央病院から近くの病院に移る。2日間の避難生活で一番困ったことはトイレの水。紙を流さないでと言われ、プールから水を汲んできたりした。仮設住宅は住んでいた近くの公園に当たって4年間住む。顔見知りはいなかった。借り上げ住宅入居でこの復興住宅に移って11年。夫は8年前に亡くなり、上の息子が2ヶ月いてくれてうれしかった。今は子どもたちと孫がしばしば訪れ、友達はたくさんいるので毎日を平穏無事に送れている。血圧が高い。今も懐中電灯と履物をそろえておく、食器など、家具は殆ど置いていない。今も地震のテレビを見ると思い出して涙ぐむ。

10月23日

・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。近くの小学校へ避難。寒さはこたえたが、水や食料には不自由しなかった。中にはテント生活していた人も。大倉山近くの仮設住宅を経てこの復興住宅へ。仮設住宅の方が楽しかった。仮設住宅のときの友人も亡くなり、1人だけ残った友人のところに遊びに行った。いろいろな病気をしている上、今夏は熱中症でいっそう弱った。困ったことがあると電話をすればすぐ駆けつけてくれるという優しく頼もしいお孫さんの話などで話が弾んだ。

・70代女性、夫婦2人暮らし。長田区で全壊。六甲アイランドの仮設住宅を経てこの復興住宅へ。震災までは自営だったが震災後は働きに出た。2年前、パーキンソン病が発症、転びやすくなるなど脚が思うように動かなくなり退職、現在では転んで頭を打って何針も縫うケガをしたり、トイレに行くのも大変に。夫婦で交替でデイサービスに出かけている。訪問時も5分以上かけて手すりを伝って玄関に出て、お話し伺いに応じてくださった。

・70代男性、一人暮らし。兵庫区からこの復興住宅に移り住んで3年目。ギャンブルが好きで、午前中は在宅しているが午後は外出している。今度来たときは寄ってください。訪問時お留守だったが、夕方、電話で連絡をくださった。

11月13日

・70代男性、長田区で全焼。一番腹が立つのは焼けてすっきりしてよかったね、と言われること。避難所は行かず、仮設住宅に当たるまで子どもの家と親戚の家を回って、6年前この復興住宅に入居。奥三がパートで働いているが、年齢のためあまり収入がない。どちらかが亡くなった時、家賃が高くて心配。引っ越したいと思っているが、今さら考えたくない。ご主人は病氣療養中。白血病の一手手前で血小板が少ない。初めのうちは大阪からいろいろな人が来たが、今はもう来なくて、近所のコミュニケーションがないのが淋しい。友人が年に一人くらい亡くなっていることも原因だ。今さら子ども達とか若い人達とは暮らしたくない。だから、他の人にも最初から一緒に暮らせと言っている。昔は兵庫の奥で百姓をしていて、60kgの俵を両手で持ったこともあると苦笑。

「西のほうから東のほうに来て知り合いもいない。老人会でもあればと思います」とシートに書かれていた。

・70代女性、一人暮らし。東灘区で全焼。自分のいた2階は無事で、下の1階の方は母娘が亡くなった。近くの小学校に避難したが、ガスの臭いがしたので出た。本人は姉が住む所まで歩いて行き、仮設住宅が当たるまでいた。六甲アイランドの仮設住宅では市から立ち退かされるまでいた。この復興住宅に来て11年。今はまだ旧公団からの借上げについて言われませんが、9年先のことをくよくよしても仕方がないと開き直って生きている。神戸に来るまでは姫路にいた。ご主人は震災前には亡くなった。昔の福原が懐かしい。仮設住宅での友人が一番多くて懐かしく、何度も会っているが、一人減り、二人減りして淋しい限り。

・70代男性、長田区で全壊。山を崩して建てた家だったので、すごい勢いで崩れたが、夫婦とも元気で無事。市場を持っていたが全壊で仕事もなく、病院に通っている。借り上げ期限まであと10年と言われても病院に近いところに越せばいいが…。

・70代女性、灘区で全壊。長屋の枠だけが残った。近くの小学校に避難して、ポートアイランドの仮設住宅に最後までいて、この復興住宅が当たった。子どもは2人。ご主人はお元気のよ

う。膝が痛いので、今年から腰掛けのついた手押し買い物カゴを持って、買い物に行っている。住宅は旧公団からの借り上げだが、何としても最後までいたい。

・70代女性。灘区で全壊。入居11年。娘さんと70才のお母さんの2人暮らし。お話しは娘さんから聞いた。三木の方に行ったが、仕事に不自由を感じたのでこちらに引っ越してきた。兄1人、姉2人。母は元気だが、旧公団からの借上げ住宅に住んでおり、これから知らないところに引っ越したくない。コミュニケーションがまた減るから、と少し心配げに答えた。

・70代男性、灘区で全壊。避難所は学校に半年、仮設住宅に3年。ちょうどお孫さんが生まれて、うれしさを表しながら帰ってこられた時にお話し伺い。奥様は59才で亡くなった。急死なので淋しい。死に目にも会えなかった。苦しまなかったのが救い。34才の娘さんは男の子と1週間前に生まれた女の子の母親。1日に1時間は歩いている。

11月27日

・60代男性、一人暮らし。中央区で被災。被災後も同じところに住んでいたが、やがて同区内の知人宅へ。そこに居続けることが困難となったため公営住宅入居を申し込み、5~6回申し込んで、3~4年前に、やっとこの復興住宅へ。5級の障害者なので障害者枠での入居とのこと。

・80代女性、一人暮らし。灘区で全壊。被災時はケガもなく元気だった。北区でご主人(2年前に亡くなった)・息子さんと暮らし、5年前にこの復興住宅へ入居。家賃減免を受けている。訪問時は来訪してきた友人との麻雀の真っ最中だったため、お話し伺いは短時間で切り上げた。

・とくに困ったことはない。震災当時は大阪に住んでいたのが被災者として入居したのではないといったことを、インターホン越しにお話し伺い。

・70代女性。足が悪く出てこれないとのことで、インターホン越しにお話し伺い。

・訪問時お留守だったが「本日急用が出来ましたので…」と書かれたメモがドアポストに。

12月11日

・70代男性、中央区で全壊。震災当時はまだ50代で、建設業で働いていたので、震災後の後片付けばかりしていた。会社の量やテント生活を経て、2ヶ月してから新築のマンションに入居、家賃補助があったので助かった。その後、身体の故障が相次いで見つかると、大腸ガンの手術は成功したものの、腰椎に入っている6本のビスが中枢神経に当たって非常に痛い訴える。最近福祉タクシー券や印鑑など大切な物をなくし不便をした。

・70代女性、灘区で被災。被災後1週間は神戸高校に避難したが、岡山県に移ったため、申し込んでもなかなか当たらず、この復興住宅に入居して8年。目と足が不自由で、毎日必死で生活している。頭がフラフラするので、おせちは百貨店のものを買うつもり。めまいがして救急車で搬送されたことも。ケースワーカー週2回が回ってくる。最近2度自転車事故に遭ったが、それでも自転車を歩行器やショッピングカート代わりに使っている。

・90代女性、長田区で全壊。息子さん(60代)と2人暮らし。息子さんは今も働いている。自身も女性で賃金が安かったからと、50~70代まで建設業で働いた。神戸で生まれ育ち、大阪の女学校ではスポーツが得意。百貨店に勤めたあと、神戸に戻って劇場勤務に。戦時色が強まる頃で、スターに会う楽しみはなくなり、最後にはニュース映画だけに。夫の故郷・熊本へ子どもと疎開、戦後神戸に戻り、倉庫や焼け跡に住み、間借り生活になっても炊事は台所を使わず外でした。今は目が悪くテレビも見ない。10年前膝関節を手術したが、足も悪くあまり外出しなくな

った。週1回のショートケアが楽しみ。

・90代女性、中央区で全壊。震災では家族全員無事だったが、戦争のときの神戸大空襲や学童疎開、避難所生活などのたいへんさも思い出される。10年前にご主人を亡くす。かつて30年にわたり神社の奉仕に出ていたが、今は足が悪く、掃除が出来ず、買い物も手押し車を押していく。週2回ヘルパーが来てくれている。子どもさんが時折弁当をもってきてくれるのがうれしい。田舎育ちで身体を使って働くのが大好きで、持病もないとのことで、年齢の割には元気そう。

12月25日

・90代女性、中央区で半壊。震災前にご主人を亡くし一人暮らし。この復興住宅へは1回の申し込みで入居。人に気を遣うより一人の方が気楽。背筋も伸びてしっかりした様子で、若い頃の仕事の話しをされた。息子さんが2日に1度訪ねてきてくれるので何も心配はない。この日もそれに備えて冷蔵庫にケーキを入れていた。ヘルパーには頼っていない。腹部にガンがあるが、進行が遅いので手術はせず点滴で抑えている。お部屋にあげていただいて40分にわたってお話しを伺ったが、訪問当日がちょうど誕生日だったので、最後にハッピーバースデーを歌ってお祝いした。